

# 『増補訂正英和字彙』に増補された訳語

李 慈 鎬

【キーワード】 英和辞書 漢語 語種 語構成 字数 専門用語

## 1. 調査の目的

1873年、柴田昌吉・子安峻の編纂になる英和辞書『附音挿圖英和字彙』が刊行される。この辞書は、ロブシャイド (Lobscheid) の『英華字典』(1866—1869) の影響を受け中国語の訳語を多く含んでいること、語数の多さ、明治期の英和辞書に与えた影響力の大きさなどで重視されるものである。

1882年には、『附音挿圖英和字彙』(以下、初版と略称する)の見出し語や訳語を増補・訂正し『増補訂正英和字彙』(以下、再版と略称する)が刊行される。再版の緒言には、再版での増補と訂正の概要に関して以下のように書いてある。

蓋シ此書タルカメテ原語ノ音讀ヲ訂シ舊版ノ譯語ヲ正シ譯字ノ繁冗ヲ省キ且ツ横植ノ譯字ヲ正植ニ變シ紙面ノ空白ヲ填メ大ニ全部ノ体裁ヲ改メ以テ閲覽ニ便ニス加之増補スルニ凡ソ一萬餘言挿圖一百餘箇ヲ以テセリ (下線は筆者)

緒言によって体裁の内容(実線の部分)に関しては分かるが、言語上の増補・訂正に関しては「一万余言」の増補(点線の部分)以外には知ることができない。

再版に関する先行研究としては、湯浅(1980)の研究がある。湯浅(1980)では、再版に増補された訳語のサンプリング調査を行い、得られた訳語7370語(原語総数3443語)を対象にその典拠を調べた。その結果として、再版に増補された訳語の6割が『医語類聚』のような術語辞典(7種)やロブシャイドとメドハスト(1847—1848)の英華辞典からのものであると指摘した。これにより、再版では訳語をどのような文献から取り入れ増補したかということは知ることができる。再版に関しては上記の緒言に頼るしかなかった状況の中、再版に増補された訳語の典拠が明らかになったのは有意義なことである。しかし、再版に増補された訳語の実態については、この研究しかなく、まだ十分な研究が行われたとは言えない。

本調査では、再版に新しく増補された見出し語に対応する訳語の性格を分析することを目的とする。初版にも載っている既存の見出し語に対する訳語の増補に関しては別稿で取り上げる予定である。なお、以下では「見出し」は辞書に掲げられた原語の意味に用いる。それを区別する必要がある場合は「本見出し」と「子見出し」のように称する。

## 2. 初版と再版の体裁

調査には、早稲田大学中央図書館所蔵の初版と再版を用いた。初版は、西垣文庫（請求番号 文庫10—04178）に収められているものを用い、再版は下記のものマイクロフィルム版（請求番号 M1—07432）を使用した。

初版：『附音挿圖英和字彙』、柴田昌吉・子安峻、1873年、日就社

再版：『増補訂正英和字彙』、柴田昌吉・子安峻、1882年、日就社

初版と再版は、どちらも、表紙、緒言、本文、附録（ただし、再版の附録には「図解」が掲載されていない）の順になっているが、本文のページ数と訳語の示し方が異なっている。初版の本文は1387ページ（全1548ページ）であるが、再版では1192ページ（全1318ページ）に減っている。しかし、見出し語の下を空けずに訳語を掲載し、1ページごとの見出し語数と訳語数は多くなっている。このような方法により、再版では初版より少ないページに「一萬餘言挿圖一百餘箇」の増補ができた。

また、初版では見出し語とは90度の角度で訳語を示しているのに対して、再版では見出し語と同様に訳語を横書きで示している。初版では漢字の上に付されていた振り仮名の位置も、再版では漢字の下に替えたほか、その数を多く減らしている。

## 3. 見出し語の増補とその訳語

### 3.1 見出し語の増補

見出し語の増補とは、下の例の「grape-sugar」のように、再版の見出し語のうち、初版にはない見出し語のことである。

[見出し語の増補]

例) grape-sugar, n.

初版	再版
grapestone, n. 葡萄核 <sup>サネ</sup>	grapestone, n. 葡萄核
grape-sugar, n. 葡萄糖	grape-sugar, n. 葡萄糖
graphic, a. 書 <sup>カキ</sup> 法 <sup>カタ</sup> ノ 善 <sup>ヨ</sup> ク 画 <sup>エ</sup> タ <sup>ガキ</sup> ル	graphic, a. 書 <sup>カキ</sup> 法 <sup>カタ</sup> ノ 善 <sup>ヨ</sup> ク 画 <sup>エ</sup> キ <sup>タ</sup> ル
精細 <sup>コソバ</sup> ニ写 <sup>ウツ</sup> シタル	精細ニ写シタル

再版の見出し語には、以下のように、初版では子見出しであったものや初版の不備の修正により再版で新たに見出し語になったもの、初版の見出し語を統合したのが見られる。

A. [初版の子見出しが再版では本見出しになったもの]

例) mother country, n.

初版	再版
mother, a. 本 <sup>ホン</sup> 国 <sup>ゴク</sup> ノ 生 <sup>ム</sup> 得 <sup>マレツキ</sup> ノ	mother, a. 生 <sup>ム</sup> 国 <sup>ゴク</sup> ノ 本 <sup>ホン</sup> 土 <sup>ド</sup> ノ 生 <sup>ム</sup> 得 <sup>マレツキ</sup> ノ
mother country 本 <sup>ホン</sup> 国 <sup>ゴク</sup> 生 <sup>ム</sup> 国 <sup>ゴク</sup>	
mother, vi. 凝 <sup>コリ</sup> 結 <sup>カタマ</sup> ル	mother, vi. 凝 <sup>コリ</sup> 結 <sup>カタマ</sup> スル 滓 <sup>カス</sup> ニナル

mother, vt. 養<sup>ヤウシ</sup>子ニナル

mother-church, n. 本<sup>ホンジ</sup>寺

mother-church, n. 本寺

mother-country, n. 生<sup>セイ</sup>国 本<sup>ホン</sup>国

motherhood, n. 為<sup>ハハタル</sup>母コト

motherhood, n. 母タルコト

B. [初版の不備を修正し新たに見出し語にたてたもの]

例) bedighted, bedight, a

初版

bedight, vt 飾<sup>カザ</sup>ル、粧<sup>ヨソホ</sup>フ、扮<sup>ケシヤウ</sup>粧スル  
飾リタル、扮粧シタル

再版

bedight, vt 飾ル、粧フ、扮粧スル  
bedighted, bedight, a 飾リタル、  
扮粧シタル

C. [初版の見出し語を統合したもの]

初版

例) re-echo, vt. 反<sup>ハンキヤウ</sup>響スル  
re-echo, vi. 反<sup>ヒビキキコト</sup>響ル

再版

re-echo, vt or i. 反響スル

一方、子見出しの増補は初版の本見出し「ponderable mater, n.」が再版では子見出しになった1例を除けば、すべてが新たに増補されたものである。

D. [初版の本見出しが再版では子見出しになったもの]

例) 初版

ponderable, a. 秤<sup>ハカルベキ</sup>ルベキ  
Ponderble mater, n. 可<sup>ハカルベキブツシツ</sup>秤物質

再版

ponderable, a. 秤ルベキ  
Ponderble mater 可秤物質

このA. B. C. D. に該当するものは、再版において新たに見出し語あるいは子見出しになったものではあるが、すでに初版にも見られるものである。したがって、A. B. C. D. に該当するものは見出し語の増補として扱わないことにする。

〈表1〉には、再版における見出し語の増補とそれに対応している訳語数を示した。ただし、ここでの訳語数とは、単語形式の訳語（以下、単語訳）以外に一文節以上すなわち句形式の訳（以下、句訳）も一つの訳語に数えたものである。その形式別の内訳に関しては、後に詳述することにする。〈表1〉によれば、見出し語の増補は8926語であり、それに対応する訳語は11636語である。以下では、この11636語の訳語に関して分析を行う。

〈表1〉見出し語の増補とその訳語

増補の区分	語数 (%)	対応する訳語の延べ語数 (%)
本見出し	6920 ( 77.5)	9500 ( 81.6)
子見出し	2006 ( 22.5)	2136 ( 18.4)
計	8926 (100.0)	11636 (100.0)

## 3.2 増補された訳語の性格

### 3.2.1 単語訳と句訳の比率

明治初期の英和辞書において見出し語に対応する訳語は、辞書の発達や訳語の定着が進むにつれ、句訳の割合が低くなる傾向を示す。たとえば、『英和対訳袖珍辞書』(1862)の訳語における句訳の割合は40.7%であった(森岡健二1991)のに対して、『附音挿圖英和字彙』(初版、1873)におけるその割合は20.0%と低くなっている(李慈鎰1997)。

再版における単語訳と句訳の割合を〈表2〉に示した。再版に増補された見出し語に対応する訳語の81.2%(異なり)が単語訳である。初版に引き続き、再版でも見出し語に対応する訳語として単語訳をつけようとしたと言える。

〈表2〉再版における単語訳と句訳の割合

訳語の形式	延べ語数 (%)	異なり語数 (%)
単語訳	9468 ( 81.7)	8531 ( 81.2)
句 訳	2119 ( 18.3)	1981 ( 18.8)
計	11587 (100.0)	10512 (100.0)

註) 訳語に「同上～」を含むもの(延べ語数49語)は除いた。

一方、句訳は18.8%となっている。句訳は、句の形式で示されることの多い子見出しに対応している訳語に偏っているだろうと推測される。しかし、実際に、子見出しに対応する訳語の単語訳と句訳との割合を調べて見れば、2036語対100語であった。子見出しそのものは句形式が多いにもかかわらず、その訳語には、意外に句訳が少なかった。つまり、再版で増補された句訳は、句の形式をとっている子見出しに対応する訳語でなく、単語の形式をとっている見出し語に対応する訳語として付けられたものが大部分である。訳語として句訳を付けたのは、本見出し(主に、単語形式)か子見出し(主に、句形式)かといった見出し語の形式の差によるものではないことが分かる。その理由は、見出し語の意味的な特徴によるものと考えられる。

例) 外国固有の事物を示す訳語

banian 印度ノ商客                      cupid 愛情ノ神

例) 動植物名を示す訳語

anguilla 鰻魚ノ類                      colocasia 芋ノ類

例) 特定分野にかかわる訳語

catling 両刃ノ小刀 (解剖用ノ)      pianissimo 甚ダ柔キ (音楽ノ語)

上記のように、見出し語が単語形式のものであっても、外国固有の事物や動植物名を示すため句訳を付けた例が見られる。特に、特定分野にかかわる訳語は、新しさとともに限られた階層で用いられたため、一般の読者のためには句訳だけでなく補足の説明も必要であった。このような理由により、句訳は単語形式の見出し語にも付けられるようになった。

### 3.2.2 単語訳の品詞性と語種

〈表3〉に、増補された訳語の81.2%を占めている単語訳の品詞の分布を示した。体言類の割合は、87.7%として他のものより遥かに高い。体言類の割合が高いのは、西洋の新しい文物や概念を紹介する媒体としての明治初期の英和辞書の特徴を反映したものと見られる。実際に、体言類の訳語には、一般語も見られるが、外国固有の事物を示す訳語や動植物名を示す訳語、特定分野にかかわる訳語が大部分を占めている。

〈表3〉 品詞の分布

品詞の分類	延べ語数 (%)	異なり語数 (%)
体言類	8200 ( 86.6)	7483 ( 87.7)
用言類	1020 ( 10.8)	849 ( 10.0)
相言類	208 ( 2.2)	162 ( 1.9)
その他	40 ( 0.4)	37 ( 0.4)
計	9468 (100.0)	8531 (100.0)

3.2.1で述べたように、この三部類の訳語は句訳を増やした原因にもなる。ただし、句訳の場合とは違って、単語訳を付けたものは、日本語にすでに対応する語があるものや化学成分のように対応する成分名を直接に付ける必要があったものである。そのほか、単語訳を付けた後に説明を加える方法を取る場合もあった。

例) 外国固有の事物を示す訳語

apple-pie 平菓亀 (菓子ノ名)                      calumet 和烟管 (亞米利加土人ノ喫煙スル莖管)

例) 動植物名を示す訳語

balsaminaceae 鳳仙花                              spongia 海綿

例) 特定分野にかかわる訳語

adnoun 形容詞                                      kinic acid 幾那酸

相言類、その他が少ないのは、元の語数が少ないほか、形容詞 (a) と副詞 (adv) などに対応する訳語を用言の活用形で示したからである。

例) bedazzlingly, adv. 閃キテ                      deep-thinking, a. 深思スル 熟考スル

〈表4〉には、8531語 (異なり語数) の語種分布を示した (判定を保留したものが31語ある)。語種の判定においては、明らかに外来語であるものを除き字音語を漢語とした。和語は、字訓語である。字音を借りて外国語を示した音訳語は外来語に分類した。〈表4〉によれば、再版に増補された見出し語の訳語は、漢語の占める比率が高い、和語をぬいて混種語が多い、外来語の比率が低くないという語種分布の特徴を持っている。

例) 漢語：家産 (chose)、貴族 (nobleness)、品行 (behaviour)

和語：袖 (manche)、黄昏 (crepuscle)、肘 (ancon)

混種語：炭酸曹達 (natron)、林巴管 (rympheduct)、羅馬菊 (anthesis)

外来語：亜的兒 (aether)、亜兒尼加 (arnica)、阿巽 (ozone)

〈表4〉語種の分布

語種	異なり語数 (%)
漢語	6272 ( 73.8)
和語	956 ( 11.3)
外来語	292 ( 3.4)
混種語	980 ( 11.3)
計	8500 (100.0)

語種分布における特徴の原因を調べるために、〈表5〉に品詞と語数の分布による相関を示した。これによれば、漢語と外来語は体言類に偏って分布していることが分かる。特に、外来語はすべて体言類である。混種語は、体言類と用言類に分布している。用言類における混種語の比率が高いのは、いわゆる「サ変動詞」が多く見られるためである。混種語と外来語の詳細なことに関しては、3.3 特定分野にかかわる訳語で述べることにする。

〈表5〉分類別語種の分布

	漢語	和語	外来語	混種語	保留	計
体言類	6148	538	292	475	30	7483
用言類	0	344	0	505	0	849
相言類	111	51	0	0	0	162
その他	13	23	0	0	1	37
計	6272	956	292	980	31	8531

### 3.3 特定分野にかかわる訳語

再版で増補された訳語のうち、体言類7483語（異なり語）を対象に特定分野にかかわる訳語を調査した。特定分野にかかわる訳語とは、医学、化学、宗教など、その分野に関連した知識を表す語である。たとえば、「結石病 (lithia)」「脈管 (vas)」(以上、医学)、「炭化水素物 (hydrocarbon)」「溶解 (eliquation)」(以上、化学)、「造物主 (demiurge)」「梵祭 (burnt-offering)」(以上、宗教) のようなものである。専門用語と類似した概念ではあるが、該当する分野で主に用いられる語であれば、「食蟻獣 (aard-vark)」「鹿蹄草 (chimaphila)」のように一般語と見られるものも、ここに含めた。特定分野にかかわる訳語の調査は、以下の方法によった。

ア. 訳語と類似する現代用語からの推定：

- ・「原告者 (accusant)」→法律
- ・「結膜 (adnata)」→医学

イ. 補足説明による判定：

- ・「旁角 (adjacent angle)」(底線ヲ一辺トナシテ成ル所ノ角) →数学
- ・「発生機 (nascent state)」(化学術ノ語) →化学

ウ、見出し語の英和辞書等の解説による判定：

- ・「青盲 (glaucoma)」→医学
- ・「加爾多教派 (cartesianism)」→宗教

註)【新英和大辞典】(2002)に示されている分野表示や意味を参考にした。

本調査では、体言類7483語のうち3894語を特定分野にかかわる訳語と判断した。〈表6〉に、その語種分布を体言類全体と比較して示した。特定分野にかかわる訳語において漢語の割合が高いのは、体言類全体で占めている割合が高いことや学術性の高い語には漢語が好まれることに関係があるだろう。混種語と外来語の割合が高いのは注目に値する。体言類全体と比較しても、各分類の半分以上を特定分野にかかわる訳語が占めていることが分かる。これに関しては、〈表7〉主な特定分野にかかわる訳語とその語種と関連して説明することにする。

〈表6〉特定分野にかかわる訳語の語種分布

語種	特定分野にかかわる訳語 (%)	体言類全体 (%)
漢語	3127 ( 80.6)	6148 ( 82.5)
和語	173 ( 4.5)	538 ( 7.2)
外来語	247 ( 6.3)	292 ( 3.9)
混種語	333 ( 8.6)	475 ( 6.4)
計	3880 (100.0)	7453 (100.0)

註1) 体言類全体との比較では、語種の判定を保留した語30語を除いた。

註2) 特定分野にかかわる訳語では、語種の判断を保留した語14語を除いた。

〈表7〉に訳語数が65語以上の分野を語種とあわせて示した。〈表7〉によれば、生物学と医学にかかわる訳語が多くて、継いで化学、地理・地質、哲学の順になる。

生物学の訳語は、「無頭動物 (acephalous)」「細胞膜 (cellouse wall)」のような学術性の高い語も含まれているが、「海綿 (spongia)」「加酒打 (cassada、樹名)」「海月 (medusa)」「蜂 (apis)」「浮萍 (duck-weed)」のような動植物名が占める割合が高いことが特徴である。生物学の訳語824語のうち、動植物名は577語に及ぶ。他の分野に比べて和語が多いのは、「海月 (medusa)」「蜂 (apis)」のような動植物名によるものである。

医学の訳語は、病気、身体器官、手術法に関連したものである。外来語が多い現在の医学用語とは違って、漢語の使用が目立っている。

病気：「関節病 (arthrodynia)」「癲癇病 (epileptical)」「毒瘡 (cacoethes)」

身体の器官：「毛細管 (capillary vessels)」「脳膜 (meninges)」

手術法：「動脈切開術 (arteriotomy)」「胃切開術 (gastrotomy)」

化学や地理・地質にかかわる訳語は、化学成分や鉄鉱石を表す訳語が各々82.8% (463÷559×100)、73.8% (169÷229×100)も占めている。

〈表7〉で見ると、生物学、化学、地理・地質の3分野は特定分野にかかわる訳語

〈表7〉主な特定分野にかかわる訳語とその語種

分野	漢語	和語	外来語	混種語	計
医学	759	8	11	39	817
化学	287	0	128	144	559
軍事	68	0	0	2	70
工学	143	0	0	8	151
宗教	55	1	0	18	74
数学	110	1	0	0	111
生物学	591	141	43	49	824
地理・地質	169	5	20	35	229
哲学	210	0	0	4	214
天文・気象	65	1	1	1	68
法律	68	0	0	0	68

のうち、その比率が高い分野である。この3分類において名称に関する訳語が多いことは、〈表6〉特定分野にかかわる訳語の語種分布で混種語と外来語の比率が高くなる理由になる。つまり、動植物、化学成分、鉄鉱石を表す際、混種語や外来語が多用されたからである。特に、化学成分を示す訳語には、135語の混種語（例：「富律阿尼水素酸 (hydroflute)」）、128語の外来語（例：「普魯的印 (protein)」）が用いられている。漢語の使用を主としていた再版ではあるが、これらを表す際には混種語と外来語を使用せざる得なかったであろう。

#### 4. 特定分野にかかわる訳語の字数とその構成パターン

一般に、漢語の体言類には2字の漢字表記語が多い。〈表8〉によれば、漢語（体言類）に属する6136語の字数分布においても2字漢字表記語はいちばん多い割合を占めている。

〈表8〉漢語（体言類）の字数別分布

	1字	2字	3字	4字	5字	6字	7字	計
語数 (%)	78 (1.3)	2817 (46.0)	2153 (35.1)	827 (13.5)	202 (3.3)	39 (0.6)	10 (0.2)	6126 (100.0)

註) カタカナ表記の訳語（10語）は除いた。

一方、特定分野にかかわる訳語の字数別分布を示した〈表9〉では、2字漢字表記語より3字漢字表記語のほうが多くなっている。〈表8〉と〈表9〉をあわせてみれば、2字漢字表記語の場合、漢語の体言類全体における特定分野にかかわる訳語の割合が32.7%  $(920 \div 2817) \times 100 = 32.7$  にとどまっている。つまり、2字漢字表記語の大部分（7割）は



一般語が占めている。それに対して、3字と4字漢字表記語の場合はその割合が各々57.6%、82.7%であり、一般語より特定分野にかかわる訳語のほうが多くなっている。

〈表9〉特定分野にかかわる訳語(漢語：体言類)の字数別分布

	1字	2字	3字	4字	5字	6字	7字	計
語数 (%)	22 (0.7)	920 (29.8)	1241 (40.2)	684 (22.1)	180 (5.8)	34 (1.1)	8 (0.3)	3089 (100.0)

註) カタカナ表記語、および、化学成分名・植物名・動物名・鉱物名は除いた。

特定分野にかかわる訳語に3字ないし4字漢字表記語が多くなったのは、単語と造語成分あるいは単語どうしの結合を通して特定分野の概念を表そうとしたからであると推測される。そのため、特定分野にかかわる訳語のうち、3字漢字表記語と4字漢字表記語の構成パターンを調べてみた。

3字漢字表記語に関しては、野村(1974)に倣って、3字漢字表記語を主語基と副語基とに分け、その構成パターンをⅠ型(○+○○)とⅡ型(○○+○)に大別した(用例は〈表11〉と〈表12〉を参照)。今回調査した特定分野の3字漢字表記語の大部分は、Ⅱ型の構成パターンをなしている。

〈表10〉3字漢字表記語の構成パターンによる分布

構成パターン	語数 (%)
Ⅰ型 (○+○○)	82 ( 8.9)
Ⅱ型 (○○+○)	838 ( 91.1)
計	920 (100.0)

以下では、特定分野にかかわる訳語の副語基に関して述べることにする。主語基である2字漢字表記語に関しては、『附音挿圖英和字彙』の場合ではあるが、李慈鎬(2004)で報告した。また、特定分野にかかわる訳語の特徴は、主語基より副語基の使用にあると考えられるからである。

〈表11〉Ⅰ型の副語基(使用頻度3以上)

順位	頻度	副語基	用 例
1	5	三	三塩基 (tribasic) 三雌蕊 (trigynian) 三雄蕊 (triandrian)
2	4	半	半視眼 (hemioptia) 半凸彫 (demi relieve) 半立方 (semi cubical)
2	4	大	大將軍 (captain general) 大名辞 (major term)
2	4	小	小循環 (pulmonic circulation) 小前提 (minor premise)
3	3	陽	陽函数 (explicit function) 陽電気 (vitreo electric)

〈表11〉で、I型の副語基の使用頻度をみれば、最上位であっても使用頻度5で高くない。〈表11〉には載っていないが、現在、字音接頭辞として用いられている「反」「非」「無」は使用頻度1にとどまっている。各副語基の使用頻度が低いので、分析は避ける。

一方、〈表12〉II型の副語基をみれば、各副語基の使用頻度が高く、医学(例:「薬」「病」)、生物学(例:「科」「類」)など特定分野にかかわる訳語に用いられた副語基の性格を反映している。

〈表12〉II型の副語基(使用頻度20以上)

順位	使用頻度	副語基	用 例
1	48	薬	解毒薬 (alexiteric) 喘息薬 (antasthmatic) 吐涎薬 (salivant)
2	46	論	記号論 (sematology) 分子論 (atomism) 方法論 (methodology)
3	43	学	物理学 (physiography) 病理学 (nosography) 薬剂学 (acology)
4	30	法	灌腸法 (enema) 三断法 (trichotomy) 証明法 (apagoge)
5	26	者	投降者 (capitulator) 投票者 (balloter) 立法者 (thesmothete)
6	24	病	黒吐病 (vomito) 伝染病 (epidemy) 貧血病 (anaemia)
6	24	器	験液器 (araeometer) 生殖器 (generative organ) 分水器 (burette)
7	22	科	傘形科 (umbelliferae) 芭蕉科 (musaceae) 鳳仙科 (balsamiferous)
8	21	類	甲虫類 (coleoptera) 棲鳥類 (perchers) 袋獣類 (marsupialia)
9	20	力	中心力 (central forces) 電気力 (electric current) 表現力 (presentative power)

4字漢字表記語は、野村(1975)に従って分類した。以下に、野村の分類に従って分類した特定分野にかかわる訳語の例を示した。

I型

(○+○)+(○+○): 視力乏弱 (amblyopy) 組織発生 (histogeny)

II型

①類 [(○+○)+○]+○: 食肉獣類 (carnivora) 流行病論 (epidemiology)

[○+(○+○)]+○: 胃切開術 (gastrotoomy) 大動脈炎 (aortitis)

②類 ○+[(○+○)+○]: 黄平象限 (nonagesimal)

○+[○+(○+○)]: 該当例なし

③類 (○・○)+(○+○): 該当例なし

[(○・○)+○]+○: 遠近視具 (opsiometer) 酸素素焰 (oxyhydrogen flame)

(○+○)+(○・○): 該当例なし

④類 (○+○+○+○): 該当例なし

〈表13〉には、4字漢字表記語の構成パターンによる分布を示した。4字漢字表記語は、特定分野にかかわる訳語においても2字漢字表記語どうしの結合が多いことが分かる。II型の①類が②類より多いのは、接頭辞的な副語基より接尾辞的な副語基を用いた結

〈表13〉 4字漢字表記語の構成パターンによる分布

構成パターン		語数 (%)	
I 型	(○+○)+(○+○)	503 ( 82.6)	
II 型	①類	[(○+○)+○]+○	48 ( 7.9)
		[○+(○+○)]+○	55 ( 9.0)
	②類	○+[(○+○)+○]	1 ( 0.2)
		○+[○+(○+○)]	— ( —)
	③類	(○・○)+(○+○)	— ( —)
		[(○・○)+○]+○	2 ( 0.3)
		(○+○)+(○・○)	— ( —)
	④類	(○+○+○+○)	— ( —)
計		609 (100.0)	

合が多く行われたからであろう。II型の③類は、略語形であるが、1882年に出版された再版で、しかも新しく造語されたばかりの特定分野にかかわる訳語において略語形は多くは現れにくいだろう。

以上、一般語と違って、特定分野にかかわる訳語は3字や4字漢字表記語が多いことが特徴であるが、その構成パターンには2字漢字表記語に造語成分の単漢字が結合したり2字漢字表記語どうしが結合した語が大部分を占めていることが分かる。

## 5. おわりに

本稿では、『増補訂正英和字彙』（再版）に新しく増補された見出し語に対応する訳語の考察を行った。

再版で増補された訳語は、西洋の新文物や概念を表す体言類が大部分を占めているが、説明(句)より単語形式の訳語を主に用いる。特定分野にかかわる訳語は、生物学、医学、化学の順に上位を占めている。漢語を多用していることと3字と4字の漢字表記語が多いことは特定分野にかかわる訳語の特徴である。3字と4字の漢字表記語の大部分は、2字漢字表記語に造語成分が結合した語や2字漢字表記語どうしが結合した語である。

初めに記したように、既存の見出し語に加えられた訳語に関しては、訂正の問題を中心に別途報告する予定である。

## 【文献】

- 石井正彦 (1997) 「専門用語の語構成—学術用語の組み立てに一般語の造語成分が活躍する—」、『日本語学』16-2、明治書院
- 李慈鎬 (1997) 「明治期英和对訳辞書『附音挿圖英和字彙』の訳語」、早稲田大学大学院文学研究科修士論文

李慈鎬 (2004) 『『附音挿圖英和字彙』における漢字表記語の性格—二字表記語の調査—』、『日本語科学』15、日本国立国語研究所

国立国語研究所 (1981) 『専門語の諸問題』、秀英出版

野村雅昭 (1974) 『三字漢語の構造』、『電子計算機による国語研究VI』、秀英出版

野村雅昭 (1975) 『四字漢語の構造』、『電子計算機による国語研究VII』、秀英出版

森岡健二 (1991) 『改訂 近代語の成立—語彙編一』、明治書院 (初版は1969)

湯浅茂雄 (1980) 『『増補訂正英和字彙』の訳語—特に増補された訳語の典拠を中心に—』、『上智大学国文学論集』14、(上記の森岡健二 (1991) に所収)

#### 【辞書類】

Lobscheid (1866-1869) 『英華字典』、HONGKONG、(東京美華書院1996複製版を用いた)

竹林滋他編 (2002) 『新英和大辞典 (第六版)』、研究社

日本国語大辞典刊行会 (2002) 『日本国語大辞典 (第二版)』、小学館

飛田良文・李漢燮 (2001) 『和英語林集成初版・再版・三版対照総索引』、港の人